

◎リレーエッセイ

「安 積 良 斎」

県教育委員会委員 高橋 金一（たかはし きんいち）

先頃、福島県内の優れた出版物を讃え出版文化の向上を図る目的で制定された福島民報出版文化賞の正賞に、「安積良斎 良斎文略 訳注」（安積國造神社宮司 安藤智重氏著 早稲田大学名誉教授 村山吉廣氏監修）が選ばれた。

本書は、郡山出身で江戸末期の儒学者安積良斎（あさかごんさい）の著作「良斎文略」の書き下し文及びその現代語訳である。本書により、良斎の思想、哲学などが理解でき、平易な現代語訳と脚注により、一般の方でも良斎の格調高い文章に触れることができる内容になっている。

ところで、安積良斎という人物について、県民の皆様はどれだけ馴染みがあるだろうか。実はかくいう私も、平成に入ってから、その業績を知るに至った一人である。

良斎について、インターネット百科事典 Wikipedia には、以下のように紹介されている。

「寛政3年（1791年）3月2日、陸奥（後の岩代）二本松藩の郡山（福島県郡山市）にある安積國造神社の第55代宮司の安藤親重の三男として生まれる。名は重信、字は子順（しじゅん）、通称は祐助、別号は見山楼。

17歳で江戸に出て佐藤一斎、林述斎らに学ぶ。

文化11年（1814年）、江戸の神田駿河台に私塾「見山楼」を開く。

見山楼は旗本小栗家の屋敷内にあり、小栗忠順もここに学んだ。

天保14年（1843年）に二本松藩校敬学館の教授、嘉永3年（1850年）には昌平黌教授となり、ペリー来航時のアメリカ国書翻訳や、プチャーチンが持参したロシア国書の返書起草などに携わる。

また、幕府へ外交意見として『盪蛮彙議』を提出した。

万延元年（1860年）11月21日没。没する7日前まで講義を行っていたと伝えられる。」

上記の良斎24歳で開塾した私塾「見山楼」の門人は2,282人に及んでいる。その門人の名前及び出身地などが記された「安積良斎門人帳」が郡山市の安積國造神社内の安積良斎記念館に現存所蔵されている。これは、平成21年に福島県の重要文化財に指定されている。

この門人帳に記載されている門人には、誰もが一度はその名を聞いたことがある、次のような幕末から明治にかけて活躍した歴史上の著名人が含まれている。

秋月悌次郎（1824～1900）

会津藩主松平容保の側近。維新後、東大教授。

上野房五郎(後の前島 密)(1835～1919)

日本の近代郵便制度創設者の一人。「郵便制度の父」と言われる。

岩崎弥太郎(1835～1885)

土佐藩士。三菱財閥の創始者。

小栗上野介(忠順)(1827～1868)

江戸末期の幕臣。勘定奉行、江戸町奉行、外国奉行を歴任。

安政7年(1860年)、日米修好通商条約批准のため

米艦ポーハタン号で渡米し、日本人で初めて地球を一周して帰国した。

清河八郎(1830～1863)

庄内藩士。尊皇攘夷の志士で、浪士組(新選組・新徴組の前身)を結成し、虎尾の会を率いて明治維新の火付け役となった。

高杉晋作(1839～1897)

長州藩士。尊皇攘夷の志士で、奇兵隊を創設。

長州藩を倒幕に方向付けたとされる。

谷 干城(1837～1911)

土佐藩士。西南戦争時に熊本鎮台司令長官。第2代学習院長。

吉田松陰(1830～1868)

長州藩士。松下村塾を開き、明治維新の精神的指導者・理論者とされる。

いずれ劣らぬ、幕末から明治にかけて、歴史の教科書にその名を連ねる数々の有名な人物が輩出しているのである。このようにその門人らの顔ぶれを見ると、良斎は、「近代日本の源流」とされる大学者であった(安藤智重著「安積良斎」より)と言っても過言ではないと思う。

良斎は朱子学者だったが、陽明学など他の学問や宗教を排することなく、学派を超えてよいものを取り入れようという自由な学風を貫いたという。

そして、早くから欧米列強の海外侵略に注意をはらい、漢訳洋書から情報を収集して、海防論を唱え、それらの集大成として、1848年(嘉永元年)には「洋外紀略(ようがいきりゃく)」を著し、鎖国政策が行われていたにも関わらず、海外貿易の必要性を説いた。

このほか、ペリー来航の際、良斎は開国か鎖国かと世論が分かれる中、幕府に対して、外交に関する意見書として「亜墨利加御取扱存寄書」を提出し、外国の軍事力のために強制されて開国するようでは国体を損ない人心を失うと指摘の上、三年間返答を延引し、その間に砲台、軍船、大砲などを造り、軍備を整えた上で返答すべきであるとした(前掲「安積良斎」93頁)という。

こうしたことから、幕末から明治維新にかけて活躍した人物の思想的淵源をなす学者であったことが窺われると思う。

最近では、平成22年(良斎没後150年)のNHKの大河ドラマ「龍馬伝」の中で、香川照之が演じる岩崎弥太郎の台詞に、「江戸にはのう、安積良斎いう漢学の偉い先生がおってのう。」「江戸に行って、天下第一の安積良斎先生に弟子入りするぜよ」というく

だりがあり、全国のお茶の間に「安積良斎」の名前が伝えられたということがあった。

幕末期における安積良斎の名前が全国に知れ渡っていたことを物語るエピソードでもある。

小学校、中学校、高等学校において我が国の歴史を勉強しても、私の記憶では、福島県出身の偉人として名前が登場するのは野口英世くらいしか思い浮かばない。

しかしながら、こうした幕末から明治にかけての我が国の基礎を作った歴史上の著名人が師事した偉大な知識人が福島県に存在したのである。こうした事実はずっと広く知られるべきではないかと思う。身近な歴史上の人物を起点として、国を動かした著名人に連なっていくという思想的系譜を知るだけでも、歴史に親しみが湧き、無味乾燥なものではなく、生き生きとした学習ができるのではないだろうか。

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故以来、ともすれば、沈みがちな福島県であるが、近代日本の礎は福島県がなければ築かれなかった、原子力から脱却し、新たな未来を作るのも福島県がリードするんだというような、些かオーバーな表現ではあるが、そうした気概を持って、この難局に立ち向かって行く必要があるのではないか。

受賞決定の数日前に開かれた出版記念祝賀会の席上、品川万里郡山市長(元郵政審議官)は、その挨拶の中で、三菱や郵便関係の知人に「御社があるのも、良斎先生のお陰、ひいては郡山のお陰」と自慢するのだ等と発言されていた。

折しも、広野町に来春開講する中高一貫校を支援するため、小泉進次郎復興大臣政務官の呼びかけにより、各界著名人によって、7月10日、「ふたばの教育応援団」が結成された。宇宙飛行士山崎直子氏ら11名のメンバーが、講師として年間最大百時間程度、同校の授業を担当する。

こうした一流の方々の生の声に触れ、その柔らかい頭脳に直接知的刺激を受けた生徒たちが、未来の福島県、未来の日本を牽引する人物になってくれることを期待したい。

安積良斎が、当時一流の学者である佐藤一斎に弟子入りし、直接その訾咳(けいがい)に接し、その後の偉大な業績を踏み出す第一歩を歩み始めたのも、良斎17歳の年であったのだから。